

会談

ヤン・ウェンリーが帝国軍総旗艦『プリュンヒルト』艦内に足を踏み入れたのは、足かけ二日間に渡って戦われたバーミリオンの会戦が終結した翌日、宇宙暦七九九年一月二日のことである。戦いに生き残った同盟軍艦艇一万数千隻は、約四万隻余りの帝国軍艦隊の十重二十重の重囲下に置かれていた。武装解除こそ為されていなかったが、僅かの抵抗のそぶりも、帝国軍による激烈な砲火による塵殺を招くことは自明だった。

無論、会戦の生き残りの同盟軍艦隊からはすでに、戦艦『ユリシーズ』を初めとする六〇隻が姿を消し、メルカツ提督を初めとする一万八二〇人の将兵が姿を消している。ヤンのいわゆる『動くシャーウッドの森』。その存在が、今後の銀河の歴史にどのような揺らぎを与えることになるのか、それはこの時点でのヤンの予想の視野を越えているのだが。

「お久しぶりです、ヤン・ウェンリー・提督」

出迎えた、赤い髪の長身の士官に、ヤンは、連戦の疲労でやや肉が落ち、囂れ気味にすら見える表情をはつきりと緩めた。

「我が帝国軍総旗艦に、同盟軍最高の智将たるヤン元帥をお迎えできたことを光栄に思います」

ジークフリード・キルヒアイスは姿勢を正し、上級者に対する

礼を示した。

本来、帝国は同盟軍を『叛乱軍』と規定し、その階級などを認めていなかったが、一五〇年にもわたる戦いの中、前線の将兵の間にはこうした儀礼が一種の慣習として定着して久しかった。『戦いは戦場で起きているんだ、会議室で起きているんじゃない』——帝国軍と同盟軍がともに、その起源を主張するに至る、勇戦の果てに降伏を余儀なくされた敵将に施した礼を、祖国の政府高官に咎められた兵の一人の言葉である。咎めておいて、さも自らの度量を示す証左であるかのように伝える。伝えられるのは、為政者の度量ではなく頽廢であり、さらに救いたいのは他者の誇るべき事跡を、強弁して我が物と主張する、第三者の目からすれば滑稽を通り過ぎて、愚劣の域に達してしまつことにすら意識の及ばぬ、客観性の欠如ではないか。ヤンにとっては皮肉極まる感想を呼ぶエピソードではある。

「あ……お出迎え頂き、痛み入ります」

キルヒアイスの鮮やかな敬礼に対して、『いつまで経っても新任の少尉みたいだ』と同盟軍の将兵たちが囁く通り、ヤンの答礼はいつものようにぎこちなかった。このどう見ても『同盟軍最高の智将』なる英雄には見えない青年を前に、謹直たるべきローエングラム元帥の親衛隊士官達までが慌ただしく視線を走らせずにはいられないようだった。

「あれが、ヤン・ウェンリーなのか？」

囁きは、ヤンの空耳ではなかった。

キルヒアイスに続いて、彼ほどの長身ではないが砂色の髪と同色の腫の士官が歩み出て敬礼を施した。

「小官はナイトハルト・ミュラーと申します。お会いできて光栄です」

ウランフの必死の抵抗の前に、ミュラーが戦場に達したときには会戦の最も決定的な段階はすでに過去形で語られるものとなっていた。それでもラインハルトは、キルヒアイスと並んでミュラーにヤンの出迎えを命じたのだ。

「とんでもない、こちらこそ……ミュラー提督」

芸のない応答だった……と何人かが後に書き残している。もっとも、このような場面での芸のある応答の模範例については記録者のすべてが沈黙を守っているのも事実ではある。

この時、ヤンはたった一人であり、副官のグリーンヒル少佐も、護衛役のシェーンコップ少将も帯同してはいなかった。ラインハルトは随行者を認めたが、単身での『ブリュンヒルト』訪問を選んだのはヤン自身だった。

ヤンを案内するキルヒアイスとミュラーの二人が足を止めたのは、この巨大で優美な戦艦の深奥部。おそらくは居住区と戦闘区画の境界にほど近い辺りと思われた。トパーズ色の瞳の士官が佇立して三人を迎え、扉を開いて彼らを室内へ招き入れた。

ヤンの視野に映ったラインハルトの姿は『正史』に詳しい。敢えて引用するならば、『楽の音が聴こえなかったのが不思議に感じられたほどだった。生きた神話、歴史と美神の寵愛を独占する若者の姿を、ヤンは手に届く距離に見たのである』——ということになる。

「キルヒアイス……」

ラインハルトがソファを立ててヤンを迎え入れ、敬礼が交わさ

れた後、退出しようとするキルヒアイスの背をラインハルトの声を追った。

「はい——？」

「お前は残ってくれ」

「はい……しかし……」

キルヒアイスの視線が一瞬ミュラーの背に走るのに、ラインハルトは小さく頷いた。

「済まぬ、ミュラー。卿は外してくれぬか」

「御意」

一瞬の遲滞も逡巡もなく敬礼が返り、それでも立ち去る背が微妙に名残惜しげだった。帝国と同盟、西国を代表する名將二人。彼らの対面の場に立ち会い、歴史の証人になりたい。ミュラーにしてもその思いは小さなものではなかったが、遂に共に戦場に立ち得なかった自分が立ち会つべき資格を主張するわけには行かない。ミュラーはそつ自身を納得させた。キルヒアイスはローエングラム元帥の腹心であり、そうでなかったとしても戦場で直にヤン・ウェンリーの鋭鋒を受け止める立場にあったのだから——と。

この会見でラインハルトがヤンの臣従を求め、ヤンが謝絶の意思を示したことから、二人の間で帝政と民主政に関する議論が交わされたことは広く知られている。

「卿の愛して止まぬ——ことと思つが——自由惑星同盟をわたしの手に売り渡したのは、同盟の国民の多数が自らの意思で選出した同盟の元首だ。民主共和政とは、人民が自由意思によって自分達自

身の制度と精神を貶める政体のことか」

「失礼ですが、閣下の仰りによつて、火事を起こすからと言つ理由で火そのものを否定なさるもののように思われます」

ヤンの反論に対して、ラインハルトがルドルフの例を引いて、民主政が専制政治を生み出す苗床となつたことと、さらにはヨフ・トリューニヒトによる『裏切り』がバーミリオン会戦の帰趨を決することになつたこと。専制政治によつて、強力な指導性を持った政治が行われ得ることなどを上げてさらに反問している。

——楽しんでいらつしやるよつだ。

まるで影そのものとなつたかのように侍していたキルヒアイスの目には、その時のラインハルトはそう映つた。自らの意見に異議を唱えられた独裁者と言つより、知的に同等なレベルの相手との間で持てた僅かの時間を惜しむかのよつだつた。

この時のヤンの反論もまた広く知られている。

市民を害する権利は市民にしかない。ルドルフを選んだのは市民自らであつて、すべてをルドルフの罪に帰するのは誤りである、と。

キルヒアイスの記憶に残つたのは、ヤンが『政治の害悪を他人のせいに行けるといつ点です』と言つたのに引き続いて、『ちょうど、子供のしつけにも似ているかと思ひます』と付け加えたことだつた。

「卿は独身だと聞いているが、その卿が子供の躰を語るとは、意外だな」

苦笑交じりになつたラインハルトに、さすがにヤンは焦つた様子で掌で何度も顔を拭つた。

「いえ、その、これは一般論、とも言えますが……専制に於いては専制者の恣意によつてすべてが定まります。火の例に戻りますが、子供が火遊びをした時のことをお考え下さい」

「それは困るな。わたしも昔、姉に叱られたことがある」

ラインハルトの応答がさすがに笑いを含んだ。

「そうです。そうして子供を叱つておいて、今度は親自身が、例えば火の付いたパイプを放置して居眠りなどをしてしまったのを、子供に指摘されたとき、『親のやることに口出しするな』と逆に叱り返したとしたらどうなるでしょう？ いえ、叱るだけでなく『大人のすることに口出しするなど生意氣だ』と体罰を以て応じたとしたら」

「……それは、そうだな。子供は混乱する。いや、体罰まで受けては二度と何も言わなくなる……だろつな」

「そうです」

ヤンは頷き、明らかにしぶしぶな様子でコーヒー・カップを口に運んだ。

「繰り返されれば、子供は叱られないことだけを考へて、親の顔を伺つよつになり、いかに火を正しく使つべきかなどは考へなくなるでしょう。それが、専制における臣民であり、一方、火をいかに正しく使つべきかに思いを致す機会を与えられる、それが民主共和政における市民のあり方となります。機会を与えられつゝ、機会を生かさなかつた、その罪は市民にのみ帰せられる、そういうことなのです」

自らの手でルドルフに帝冠を授けた以上、ルドルフによる弾圧は、旧銀河連邦市民によつて甘受せざるを得ない結果とも言え

る……ヤンのこの発言は、後世、彼を民主共和政体の偶像として理想化する傾向が強まっていく中で多くの史家、特に同盟側に足場を置く人々によって故意に無視されることになる。

「……まして閣下、あなたのような聡明な君主の出現が稀なことであること、それにどのような聡明な君主でも長い治政の間、継続して聡明であり得ることが非常な困難を伴うことも歴史に照らせば明らかです」

ほとんどの王朝の歴史は、一代の興隆に引き続く一〇数代に渡る没落の物語である。いや、一〇数代もの系譜を刻む王朝こそ稀であり、ただの一代で興隆と衰亡を同じくした例も少なくはない。

「専制とはただ一人の人間が全てに責任を負い続けるといふ政治システムです。どんな英雄でも、そんな途方もない責任を永遠に負い続けることは不可能です。少なくとも、私はご免です。もし、万一にも私のような人間が君主になったとすれば、周囲が心配して私が責任を負えないような仕組みを作ってしまうでしょうけれど、まさにそれこそが専制の害毒ではないか、私にはそう思えてならないのです」

多くの王朝が代を追うことに衰弱への道を転げ落ちていくもう一つの理由がそれではないか、とヤンは言う。玉座に相応しからぬ君主と、その君主を政治的な責任から切り離そうとする周囲。それらの相乗作用が、数十年の内に専制政体を滅亡へのレールの上に載せてしまふ。

さすがにラインハルトは苦笑して応じた。

「卿の主張は大胆であり、斬新でもあるが、極端な気もするな。それで、卿はわたしの説得を試みているわけなのか。後継者のことに

までわたしの力が及び続けるとは思えぬ。卿の信奉する民主政にしても、卿の勇戦を無視して、我が身の安泰と引き替えにわたしへの無条件降伏を申し入れてきた卿らの元首もまた、アルレ・ハイネーゼンとやらの後継者ではないのか。その意味で、卿の議論がそれほどに説得力を持つとは、わたしには思えぬな」

「……いいえ、そついうわけではなく……あなたの主張に対してアンチ・テーゼを提示してみているだけなのです」

この議論は、数回のやりとりの後、二人のいずれもが相手の論旨に対しては決定的な肯定も否定も示すには至らず、言ってみれば相互の個人的なレベルの理解を深めた、という段階で終止符を打つ。この時代を代表する傑出した二人の用兵者の階段としてははなはだ得るところのない会話として終わったとも言えた。

ただ、この時、ラインハルトの傍らにキルヒアイスが待っていたことが、その後の時の流れに微妙な影響を与えることになる。

キルヒアイスを顧み、ラインハルトは微笑を浮かべて言葉を継いだ。

「わたしには親友がいる。このキルヒアイスだ。わたしたちは誓ったのだ。共に宇宙を手に入れよう……と。同時に、こつも誓った。卑劣な大貴族どもの真似はすまい、必ず陣頭に立つて戦い、勝利を得よう……あの戦いで卿に敗れてヴァルハラを潜っていたとしても、わたしは後悔はしなかっただろう。キルヒアイスとともに、卿と直に戦うことができたのだから」

微かな自嘲に似た響きがそれに続いた。

「勝てこそしなかったが」

「私が勝っていたなら、私がこつして『ブリュンヒルト』であなた